

短頭犬種気道症候群

短頭犬種気道症候群とは、①外鼻孔の狭窄・②扁桃の拡張・③軟口蓋の過長・④喉頭小嚢の外反・⑤声門裂の狭窄・⑥喉頭・気管の虚脱が単一あるいは複合して発症する症候群である。

[好発犬種] イングリッシュ・ブルドッグ、パグ、ボストン・テリア、ボクサー、ペキニーズ、シーズー、フレンチブルドッグ、シャーペイ、キャバリアなど

[症状] 呼吸性雑音(いびき音)、運動不耐性、呼吸筋疲労、呼吸困難、元気消失、食欲低下、高体温、重症例ではチアノーゼや失神も見られる。(体重や生活環境にも左右される)

[文献] 短頭犬種気道症候群に陥った犬を外科的に矯正した結果、以下のような内訳であった。

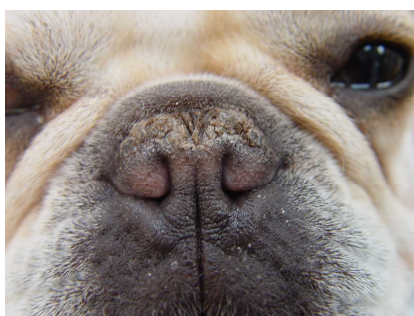
Results of surgical correction of Abnormalities associated with Brachycephalic airway obstruction Syndrome in dogs in Australia.

Torrez CV and Hunt GB., (2006) J.Small Anim.Pract. 47:150-154

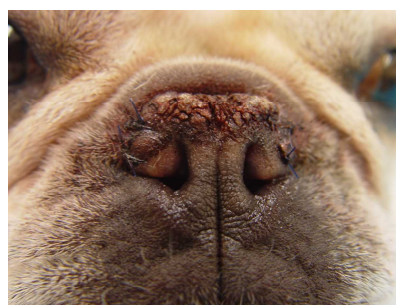
| | |
|--------|----------------|
| 外鼻孔狭窄 | : 31 頭 (42.5%) |
| 軟口蓋過長 | : 63 頭 (86.3%) |
| 喉頭小嚢反転 | : 43 頭 (58.9%) |
| 喉頭虚脱 | : 34 頭 (53%) |

短頭犬種気道症候群は、上述した①から⑥からなるが、主なものは、外鼻孔狭窄・軟口蓋過長・喉頭小嚢反転・喉頭虚脱である。

[外鼻孔狭窄] 外鼻軟骨の中隔方向への虚脱。吸気時に外鼻孔の拡張不全があり、呼吸障害が発症する。重症例は外科的に矯正する。軟口蓋過長の手術と同時に行うことが多い。

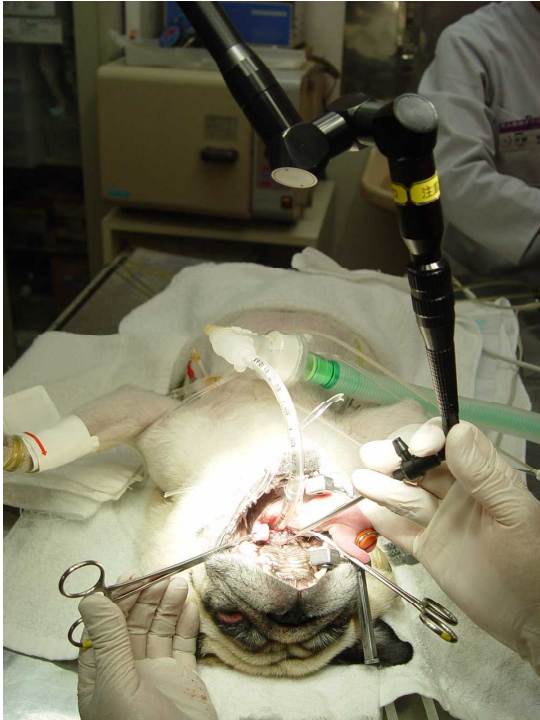


手術前



手術後

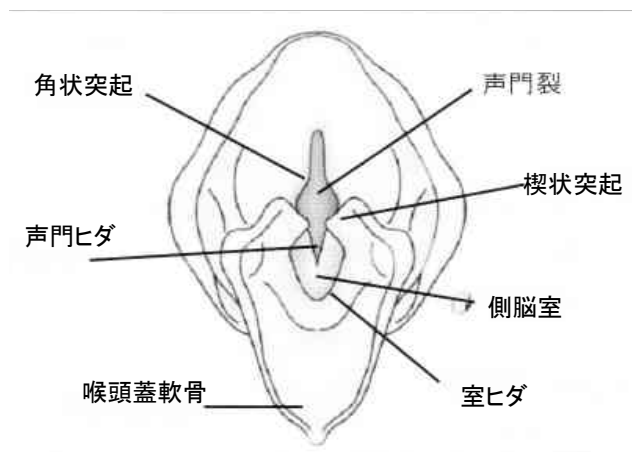
〔軟口蓋過長〕 口腔内上顎は、硬口蓋から始まり軟口蓋へと続く。この軟口蓋が過長(長くなりすぎ)して下垂し、気道の入り口である喉頭を覆う疾患である。下垂の程度により症状は様々であるが、重症例は外科的に切除し呼吸を改善させる。



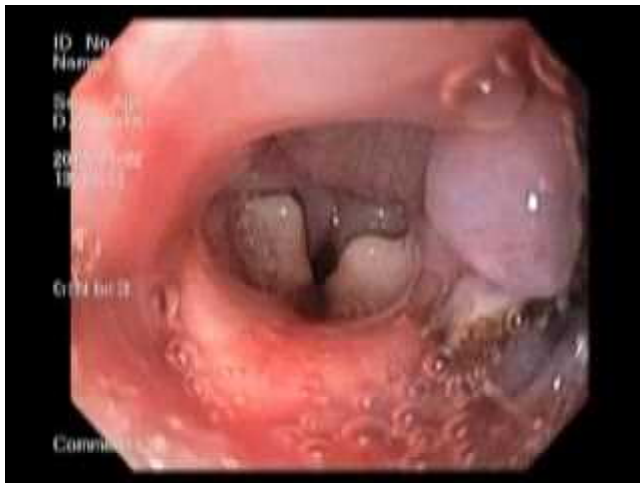
当院では、出血を最小限にし術後の炎症腫脹を最小限にするために CO2 レーザーにより切除を行っている。

〈過長した軟口蓋を CO2 レーザーにて切除〉

〔喉頭小囊反転・喉頭虚脱〕 喉頭虚脱は喉頭軟骨が強度を失い、内側へ虚脱する疾患であり、呼吸障害を引き起こす。ステージⅠからⅢに分けられ、ステージⅠは喉頭小囊反転、ステージⅡは披裂軟骨の楔状突起の虚脱、ステージⅢは披裂軟骨の小角突起の虚脱である。



喉頭の解剖図



喉頭虚脱ステージⅡ (楔状突起の虚脱)

治療法：ステージⅠ (喉頭小囊反転)は外科的に切除して治療するが、ステージⅡおよびⅢに関しては、現在治療法がない。